

JIA 中国支部建築家大会 in 米子 2020

菊竹清訓 ホテル東光園

誕生の舞台裏—遠藤勝勸氏に聞く

中国支部鳥取地域会
来間直樹

中国支部の建築家大会

中国支部では、5県持ち回りで支部建築家大会を毎年開催しています。大会のプログラムはそれぞれ主幹する地域会が趣向を凝らしますが、主にその地域に根ざしたレクチャー、シンポジウム、街並みや建築の見学会などを実施しています。また、11回を数える「中国建築大賞」の審査講評、表彰も行われ、初回から10年審査委員長を務めていただいた内藤廣先生、昨年から引き継いでいただいた古谷誠章先生にも参加いただいています。

鳥取地域会は8名（おそらく全国で最小の地域会）ということもあり、お隣の島根地域会と共同で大会を開催しています。鳥取県での前回開催は2012年で、鳥取県東部の山裾の小さな城下町、鹿野町にある廃校をリノベーションした劇場「鳥の劇場」を会場に開催しました。参加者全員が現地の同じ温泉宿に宿泊（合宿方式と呼んでいます）して懇親も図るなど、都市部ではできない地域らしい大会となりました。鳥取県での開催はそれ以来です。

「ホテル東光園」を題材に対談を計画

ご存じのように、「ホテル東光園」は建築家菊竹清訓の代表作の1つです。1964年10月に竣工したこの建築は、その年に国立公園大山で開催された「全国植樹祭」にご臨席になる昭和天皇の宿泊場所をつくることをきっかけに新築されました。それにしても35歳の若手建築家がその設計を担ったことは、驚くべきことです。

私は菊竹事務所に数年在籍し、東京で事務所を立ち上

げた後、2006年に郷里の米子に拠点を移して今日に至ります。事務所OBということもあり、各地から東光園を見学に来られる建築家の方や学生さんなどをご案内してきましたが、特にこの数年その回数が増えていました。折しも菊竹先生の没後10年ということで、2021年1月22日から島根県立美術館の企画展「菊竹清訓 山陰と建築」が予定されていたので、2020年度の支部建築家大会は、東光園を会場に展覧会に関連したものにしたと考えていました。そこで、菊竹事務所の元副所長で菊竹先生を40年にわたって支えた遠藤勝勸さんをお招きし、東光園の設計の経緯や当時のエピソード、舞台裏のお話をうかがう機会としました。遠藤さんとの対談を早稲田大学の古谷先生に、全体のコーディネートを斎藤信吾さん（建築家、元早稲田大学講師）にお願いしました。お2人は、国立近現代建築資料館で2014年に開催された「建築のこころ アーカイブにみる菊竹清訓」展に向け、遠藤さんと共に菊竹事務所に残る図面をはじめとした、膨大な建築資料の整理を担われ、その後も旧都城市民会館の保存等にも尽力いただいています。

コロナ禍の中、大会開催について議論がありましたが、島根県立美術館での展覧会が予定通り開催されたことを受け、対面での実施に踏み切りました。山陰両県以外からの参加が難しいことと、全国の多くの方と大会を共有したいと考え、YouTubeによる同時配信にチャレンジしました。

スライドを見ながら設計エピソードをうかがう

大会のスタートは、斎藤信吾さんのレクチャーから。東光園解説「柱は空間に場を与え床は空間を規定する」と題して、当時の菊竹先生の評価や、東光園がいかなる建築でどう位置付けられたのか、わかりやすくお話しいただきました。東光園は出雲と伊勢の実験的融合であり、古代建築の様式を現代に展開したものではないかという斎藤さんの仮説はとても興味深いものでした。

その後、遠藤さんと古谷先生の対談に移ります。お話の内容に応じ、斎藤さんに200枚以上のスライドから関連した写真や図面を表示していただきます。遠藤さんが

建築家菊竹清訓の代表作
「ホテル東光園」



斎藤信吾さんのレクチャー



遠藤勝勸さん(左)と古谷誠章先生の対談

口火をきり、1963年の出雲大社庁舎の竣工式と京都国際会議場のコンペの話から始まりました。驚いたことに、最初の45分間は遠藤さんが喋りっぱなしで会場は圧倒されました。古谷先生の「そろそろ聞いてもいいですか?」の間の手に、会場にはどっと笑いが。その後お2人の対談が続き、終了まであつという間の2時間でした。

私が印象深く感じたのは以下のエピソードです。

- 京都国際会議場のコンペでは4ヵ月間事務所の仕事を全てストップして取り組み、アイデアを皆で出し合った。それが東光園や佐渡グランドホテル、都城市民会館の設計に生きている。コンペ後、東光園の設計で行き詰まると数人で議論が始まり、京都国際会議場の「世界」に戻るとアイデアが出て設計が進んでいった。京都国際会議場のコンペは落選したが、仮に1等であつたら、東光園や都城市民会館、佐渡グランドホテル等は生まれていなかった。
- 島根県立博物館の設計者に決まり田部知事を訪ねる際、当時東光園で作庭していた彫刻家 流政之から、米子から山陰の風土を感じ、人と交流しながら松江に行くようアドバイスを受け、その後も東光園に逗留することとなる。それが「ホテル東光園」の設計につながっていく。また、所員には現場監理で地方に赴く際、設計図通り施工するのではなく、流氏のアドバイスと同じように、その地域の風土を感じながら設計をやり直すよう指示した。
- 菊竹先生は、所員もそれぞれの「か」「かた」「かたち」を持っていると思っていた。よって所員を信じ、具体的な「かたち」を指示することはしなかった。

その他、現場でのエピソード「砂利の交換」、「左官との喧嘩話」、「ガラスの避難階段誕生秘話」など、現在では考えられないようなお話ばかりでした。

わずか1年の工期の中、メールもFAXもなく、1人で途方もない検討事項をこなした、当時29歳の遠藤さんの建築をつくる気持ちの強さはとても真似できません。現在もただ図面を渡せば建築はできるはずもなく、現場監

理でもじたばたしているばかりでしたが、改めてお話をうかがい、まだまだ覚悟が足りないと思うばかりでした。

建築を次の世代に伝えていくために

前述のような建築メディアに載らないエピソードの中に、建築をつくるための大切な何かがあるのではないかと私は以前から感じていました。今回の大会の目的は、対談をきちんと記録し次の世代へ伝えること。ぜひそれぞれの「大切な何か」を感じ取ってほしいと思います。

東光園本館は2017年に登録有形文化財に登録されました。その際の記念シンポジウムとして伊東豊雄先生をお招きし、同じく東光園ロビーにてシンポジウムを開催しました(日本建築学会中国支部鳥取支所主催、JIA鳥取、島根地域会共催)。この支部大会は、その第2弾とも言うべき位置付けとしています。今後も、東光園様のご協力のもと、このような機会をつくっていきたいと考えています。

米子市には東光園のほか、村野藤吾先生の米子市公会堂、佐藤功一先生の旧米子市庁舎(現山陰歴史館)と早稲田大学を代表する建築家の作品が残っています。米子市公会堂は耐震改修が終わり長寿命化の一步が計られています。旧米子市庁舎も文化財として、時間はかかるでしょうが今後の整備が期待できます。一方東光園ですが、老朽化がかなり進んでおり、すぐにでも手をつけなければいけない状態です。しかしながら民間企業ゆえの難しさ、コロナ禍でのダメージもあり、その方向はなかなか見えません。この建築を次世代が引き継ぐためには私たちに何ができるのか、地元の建築家として地域会のメンバーとともに考えていきたいと思っています。ぜひ全国のJIA会員のみなさまのお知恵もお貸しいただけたらと存じます。

最後に、対談内容についてはYouTubeで公開している動画もぜひご覧下さい。

■ JIA 中国支部建築家大会 in 米子 2020

「菊竹清訓 ホテル東光園誕生の舞台裏ー遠藤勝勸氏に聞く」

<https://www.youtube.com/watch?v=WxImY0Afv4E>